

真田三代武秀録

二篇ノ一



志田三代記合卷二篇ノ序

- 一 志田二代一書有る歟 昌年信玄に謀る事
- 一 小山田信茂軍兵 信玄小山田系に密告して是
- 一 武田勢名倉政 兵 名倉系に死に事
- 一 小山田信茂軍兵 昌年万全の謀りし事
- 一 信玄身心小山田系白 兵 北原川合戦の時
- 一 北田尾法と信茂 兵 石弓並に矢を射る事
- 一 北原白川合戦 兵 昌年分討つ事
- 一 北原氏忠義軍 兵 大石と北田地を争ふ事
- 一 北原氏忠義軍 兵 志田馬山孫を討つ事

念念の一致に付後事御事平大に原收い今二原致その向うん事
差こも知し以捨首を礎て何の利益もせさうううう志田信徳の父
こも合年ともあり少の原こりれいけ冬の夜射の利益いせうう
うう始の権より峰分近ういこまへん^{ツテ}として合年昌年うP
あし一原年こ小糸の各ここ小佛板分信さう後しとう時分
見下葉の化う政さううなれで原年。又年の年日原あれい後入
年うのうまへんそれれ思いあうう年あ大と原うはこおは入加
へし年を根根踏くこも小糸の方後た遺物の中あへんううあ入
分原の破り信さうう遺次うう補うこも年うのあまうしうの甲
原年大に後して信さうう遺破れなう

小山田信成後年 天昌年万全の原年うう 述うま

何れも原年ううのう原年大に原年し信さうう社大切こ身うPと
世も又こ原年ううのう原年ううのう原年ううのう原年ううのう原年
の甲へ刺し入右に身たこあう知さうう信さううの因へ甲原うの原し後原
し一見原の網々うの連山原うの原後原して原う原うの原うの原う
原原れうれい小糸の方原原の利う原れい今い遺射の原ううの原い
し原の原しこ原年ううの原原うの原原うの原原うの原原うの原原
原うの原原し原う甲原の原原ううの原原小山田原原原原の原社
原原原うの原と破り原原の原原うの原原し原原の原原うの原原
原の原原原原原原の原原し原原原原原原の原原原原原原の原原原

けをい比れうき御して小田系近加入後任うをうししう信を
るを舟お後叶うあまこととをよん為り一我小田系近加入
事いおしと後中し城の落部き一年を知らししうと後後據の
取うるをまし後後叶う取うるをましと思ふおるに取うるに
據いして取うるハサホに比れま後とふう一後として後任う能く
信をういけをいえと小田系向いし取うるがうの事いまを
信う刻しての二城うしん信うももおるあふはや信をに取うるを
そ信後まてし昌幸うう一にまう一取うる見身は信任う喰まど
し信必取うるま下昌幸を信して天信あう見の作必取うる信
う小を全う取うるに信いしてあふ立別れ進昌幸いまを

けをう進し見友人し信うて海津に籠てと後し信をに取うる
信と昌幸けをいえまに近とらこくう信をまに信いぬま
い信事う思れんやと名目う探あうまう永保十二年八月廿
けをい進ま後かゆられうう傷山線内及山利お小山西信
信をい進ま後かゆられうう傷山線内及山利お小山西信
城にお系氏然あ後の上取られ信く信う中し甲府信目
信をい進まのこことと信をい進まのこことと信をい進まの
見し中し信をい進まのこことと信をい進まのこことと信をい
川し進ま後かゆられし信をい進まのこことと信をい進まの
信をい進まのこことと信をい進まのこことと信をい進まの

小糸野を食むと幸多引をちて退れども又相模川近引にうづ武田勝

勝しと云ふして退くく小田原に疎せんと進めり居るに先敢後

の致有るを幾ら相模川の東に押して居るに先敢後と云ふは

且武田も是れをて是は武田の北田尾流舟に於ての事と云ふ

進めりとも聞らむして攻めんとて昌幸を創し必偏るるを以

て北田原の御將に於て川の流を高し北田原の川の水の流を

高し御して後年より流しうとて是れは北田原の御將に

あれたる武田の下知の事と云ふは北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

北田原の御將に北田原の御將に北田原の御將に

半少年し久成忠元公を著し後これに東まうに白川の川口の港
氣にまじり候も味方の川に流し是の流もいささか武田方流の確り
たもつたし流に在しと付味方の不致り川中込後ともは流の氣
不存れあて流に在る人等皆のよふ射候も氣に流しなす候も
此れ多分より川中より流し一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
武田方流の流をいささか一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
あて候し候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
まゝももりの鼻のまゝあて候し候も
故し候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も

を流す武田方不仕在化に流し一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
飲の取し候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
川にこと居候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
川に候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も
候も一歩ももりの鼻のまゝあて候し候も

海へかく取入一色表作化取にり持成の儘に小田原の城へ参上し
後日尾花より古坂川の一城に参上り大進守治郎と合會して西段
は参上致し治くししと申り馳し必小田原迄礼を申しあげられ
と取上るるを憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ礼を致すも
この位もいと憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ礼を致すも
と申すに依りて小田原を以て成りては白川の一城に致すに掛
りては何の事ともなく小田原迄攻め入りし事案もよく武田も治
川村に保つ治して味方の度度より汗をばしと申されけり此の如き事
能く申し一色殺しに治くししと申されけり此の如き事と申し甲府へ
礼を致すもいと憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ礼を致すも
いと憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ礼を致すも

小田原の條に申す事
と申すに依りて小田原を以て成りては白川の一城に致すに掛

甲府の酒白川の一城に掛りては白川の一城に致すに掛
りては何の事ともなく小田原迄攻め入りし事案もよく武田も治
川村に保つ治して味方の度度より汗をばしと申されけり此の如き事
能く申し一色殺しに治くししと申されけり此の如き事と申し甲府へ
礼を致すもいと憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ
いと憂へししと申されけり此の如き事と申し甲府へ礼を致すも

本系の後、原の角のちあつ甲の徳首に志あり一合と云。原の
紋物たるを並ぶるをて一徳見二尺の太身の徳ッ搦て太刀ち
こましく一徳の徳一徳家太八徳徳新徳徳と一徳と云と云
月徳曰お米先の而に徳ッかたれい徳の徳もあつ太徳りう徳に切
りう^{キリ}新徳しうてか太徳徳徳に徳れま小田京徳徳し徳まれい
太田方徳し徳徳し徳徳し徳下徳徳入徳家徳かッ徳けしうい
徳田太徳ち徳くこ徳徳徳中へ久入る徳徳徳一甲徳徳徳
あつしと小田京に徳か徳又小系徳太徳くあ并あ徳て徳徳
山徳下徳徳徳徳の友徳とま徳しうい徳徳徳徳徳徳大に
徳して小田京徳徳一徳徳山徳昌徳徳徳徳の将りれい系年

の徳を徳ちあつ甲ッ徳と云先と陰ッ引徳し徳太徳徳
あつれ有ッ徳と徳徳徳太徳徳馬ッ引徳し徳系徳徳徳
事れくくこ徳人系ありのを力ッち徳りま徳止と山徳向小下
ま徳大に徳徳徳徳の徳こ徳系あれと徳徳らッ徳徳徳徳い
か徳の系人徳徳徳又徳ッ徳と徳し徳人う徳て徳人ま
山徳徳し徳りこ徳徳あ一徳と徳けま徳人徳あまあれと云徳又徳
て徳徳に徳ッあまッ徳し徳徳徳らま徳ら徳と云徳と山徳ら徳甲
徳徳とああ山徳あて徳徳とま徳徳徳徳徳徳徳徳徳徳
そいしう一系に系徳しう徳忠徳系に徳徳り徳と太徳又山徳
とあいしうけ時と徳下徳徳ら口徳徳徳らり而に徳て徳し徳

ハ氏を老よの山道九小田原へ引返く不小田原へ甲府郡礼大して
たうふいふれい千幸る若の殿いりううと陸小田原へ大幸る能一
の兵を陸へ引かろ是介して小田原の城下へ攻入く攻入て是城
合戦止半一ありと陸奥城を九の中へ容易く成し能く一説に
取目り遠くうけ付と取後佐に先陣にう極先丹後ちう運んふ
攻下れうう能く一説に極先丹後し新後へ攻入るふに叶ふ武
田信玄小田原へ攻入し小田原の攻めは分大に勝るふ是介甲府
の先を極先丹後へ又川中へ攻入るは信玄の極先丹後し是北条の
利小に若信玄の攻めは分大に勝るふは信玄の極先丹後し是北条の
信玄の攻めは分大に勝るふは信玄の極先丹後し是北条の

海津の城中大に同幸取社と取本法り一こあに叶比う信玄へは
とんと叶比う早うう小田原をうに信玄を攻しう

武田勝頼小田原退任 山梨馬場後殿し事

叶比う取後佐に先陣にう極先丹後ちう運んふ
攻下れうう能く一説に極先丹後し新後へ攻入るふに叶ふ武
田信玄小田原へ攻入し小田原の攻めは分大に勝るふ是介甲府
の先を極先丹後へ又川中へ攻入るは信玄の極先丹後し是北条の
利小に若信玄の攻めは分大に勝るふは信玄の極先丹後し是北条の
信玄の攻めは分大に勝るふは信玄の極先丹後し是北条の

凡四のこま下ッをの保志ヲ保して居多しなり。此ノ織田徳川の友
將天下ヲ保つゝあつた運命ノ府にせしめて必す保つ所にして其處にま
し一處に及ばぬ。忽ち徳川の天下となつた。其時社奉行申上りて
ハ撫シ居るを今武威感感との南をあらはせ川織田の友に彼をふ
保して合新と人申上りてをあらはせ。相やとて。年よりを交して。年ッ
引起さしんか。進。お政りあり。こる。氏。の。誓。し。誓。く。各。危。シ。見
かり。時。の。好。の。時。而。一。至。久。し。け。度。を。こ。と。小。田。原。へ。入。り。ま。す。年。ハ
今。と。及。た。彈。口。へ。年。を。ま。て。一。各。各。官。申。上。り。こ。し。る。を。こ。又。小。田。原。を。仰。め。し
事。保。く。と。け。至。化。の。引。入。し。も。え。い。と。取。下。と。尻。柄。多。る。を。こ。え。保。い。毎。に
小。田。原。の。成。り。保。る。年。付。小。田。原。し。是。う。え。網。こ。と。知。り。た。る。也。し。

昌幸只り伏し保まると小田原の成は是がえ納くと彼まじり交ハ
保に甲府に客居せむ況して信長の事今下の様りうう事ッ新リ
あつたやん中、思ひ多るをPくうとや後、も各の保トをい知れた
今甲府へ引退り小治、小糸の勢必十倍してまきし。進討てまきし
三宿作とて曾に交合幾まきし。此の保をくいのやうな魚例の後殿ト
い退りしと山猿島陽の尾目にをけPくれ。保居不人の保、を之に
右保ち進めま口の二と利ま、保られた。ま、味方、強きをけうとてま
新レ城を、居られたら人の下、をケ、居、居、終、希下とてまきし。武川、
これ居強ありとて下ッを、是、益、保、し、う、人、保、して、居、居、保、年
成、ま、こ、に、して、又、保、居、る、保、も、多、い、氏、の、保、居、し、お、小、田、原、を、完、保、こ、

仰りし研りて下し治めし人今に海麻の如く祀れ天か信まう生し
免に海し治めしめり小治に織田戸口を利小系孫と遊ばし是に治め
端い身の事居りんといはる下武士ト名をこ繁く城陽と対死する
社氏と云れ人の端い叶而くくとお命の治るも知れ久然うをめて
治にウツクミ九年の春下こ秋に遊りて死して人の居るに因りて系れ先能
の系承り人の形とあり書しなり是武川の面目と云る今其口原の
系承り久におお死下する所を無仁の礼に山名系全細川孫文の合死
の時とあり今も傳負かしの病死に

大平の治代にせれし然しさい南卷の之にりり死する
治りてとをを多下り大身と云りありざりけい城死する社氏之成し

研り扱く系下に多りん人多い身ハ小系ヲ攻むハ系を孫に近ハ武原
父系より有る系に改とハりれい山孫昌系子孫い系しくもハり
これしお外初る人を社を遷りれ益ヤヒう小系三信に信習し多り
建所能の夏や多り始彼て色り先甲府のゆりい非ハノ改せし
と取ら攻むしと後と小系ヲ攻むと何の初る事ハ今下と下り
とつてハりれい信を大に感しけお社氏田の礎イヒスこ能く後及後
とと作れしとしういある事と山名下りて小田系ヲ友家神社
佛堂をく一教火し後を治しりれい武田信の次子くと後孫分
引進まらる

長永以下より勢斗系 小系所伝たふかりま

けふのうらむ後川も海に半一也いも多ふ久と昔しうの信をたて
大に夢さうし後原の極まう山線もゆり進くふも水も
かこ進射もをけしうた波破てをりしにほる川う熱もふも
幾井の成る同友大和も大早もも度り合致高し日暮しして難
こふ小に昔身うの信をさうのた名に飲うて文防くう及るゆりう
忙然
あつるは

其日二行二篇目合卷ノ序終

三年卯酉

三年一住家之